

University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2023(令和5)年07月20日発行【隔月刊】

[特集]
私立大学の個性と多様性を表す周年事業

大学時報

NO.411
2023. **07**



日本私立大学連盟

だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

国際武道大学



南房総の豊かな自然の中に位置する国際武道大学



キャンパスから水平線を望む

太平洋を望むキャンパス

国際武道大学は1984年4月、千葉外房の太平洋を一望する勝浦市の高台に開学した。

校舎の窓から見えるマリンプルーの水平線は、わずかに湾曲し、球体の惑星に住んでいることを体感できる。夏は涼しく冬は暖かい気候で、観測史上一度も猛暑日（35℃以上）を記録したことがない。また、本学のキャンパスには塀が無く、365日24時間開かれている。地域住民が学内を自由に散策し、芝生に寝そべって流星群を鑑賞することもできる。学生の多くは市内のアパートに住んでおり、早朝からトレーニングに集まり、夜遅くに勉強会やクラブ活動を終えて校舎から出てくる。

創設者の松前重義は、国際柔道連盟（IJF）会長選挙の過程で、国際感覚を十分に備えた武道・スポーツの指導者を育成する大学設立を公約し、多くの方々の協力を得て実現させた。

当時は、ソ連のアフガニスタン侵攻でモスクワオ

リンピックボイコットに動く世界に、国際柔道連盟会長として対峙し、同時並行で国際武道大学の設立に奔走した。

松前ならどのような決断をするのか、それを想像しながら、昨年度は柔道を研鑽するウクライナの中学生達とロシアの極東連邦大学からの留学生を同時に受け入れた。

また、昨年末に人工知能サービスが無料公開され、大学の授業も大きな変革期を迎えることとなった。科学者としてIT技術革新（当時の世界標準を変える長距離電話回線無装荷ケーブルの発明）を成し遂げた松前ならどのように対応するだろうか。

国際武道大学は、「たから」であるこの自然環境の中で、学生達の身体・五感を刺激し、新しい時代の大学教育を展開していく。

大学時報

2023.07 / NO.411

CONTENTS

94 | 92 86 82 76 74 | 72 | 68 62 56 48 | 40 36 34 | 18 | 10

だいがくのたから 国際武道大学

大学点描 松山大学

巻頭言 「未来に、確かな実りをもたらす大学へ」 新井英夫

視点 コモンズとしての大学を目指して 上野裕一

座談会 アントレプレナーシップ教育の現在地

佐野芳枝 / 川副智行 / 島岡未来子 / 濱田祐太 / 古賀碧 / 栄田源 / (司会) 山田健太

特集 私立大学の個性と多様性を表す周年事業

創立百四十周年・再興六十周年を祝う 河野訓

コロナ禍の下での学部100周年事業

— 法政大学文学部における成果と課題 — 小倉淳一

二十歳を迎えた博物館 諸事万端に耕雲種月 山下純平

中興の祖、山岡順太郎のこと 芝井敬司

地域との協働による周年の取り組み—池袋キャンパス100周年記念事業— 佐々木静

「ガクモンノススメ」プロジェクト 山崎敬夫

ずいそう 縁 松木健一

小特集 年内入試のこれから

「探究入試Spiral」のねらいと概要 高原幸治

探究力を測る入試の実践とこれから 佐藤浩人

獨協クラスの現況と今後について 小川浩幸

能動的な受験生を求める高大接続入試 大森達也

寄稿

衝撃のAI「ChatGPT」に大学はどう反応したか 亀松太郎

表紙：トウガラシ

ナス科の多年草。6月に開花時期を迎え、7月から赤く完熟した実を収穫します。ウスターソースやタバスコソース、辣油、カレー、キムチ、タコス等に用いられ、世界で広く親しまれている香辛料の一つです。日本で主流のタカノツメ(鷹の爪)は最も辛く、香りの良い種と言われます。

*表紙デザインでは教育・成長・向上を植物になぞらえ、1年ごとにさまざまな種・葉・花・実を紹介します。今年度は実のシリーズです。

100

寄稿「私大連フォーラム2022×大学時報連動企画」

地域連携・社会連携の教育的価値について

—陸前高田フィールドワークの活動を通して— 安齋徹

私の授業実践〜教育現場の最前線から〜

「学習と人生のつながり」を問える教育 山内薫

明日への試み 立教大学スポーツウエルネス学部

体育、福祉そしてスポーツウエルネスへ

—立教大学スポーツウエルネス学部の新設— 沼澤秀雄

加盟校の幸福度ランキングアップ《チャイム編2》

音の記憶—永遠の愛校心を求めて— 川添麻衣子

キャンパスの原風景としてのチャイム 秋岡陽

洗練された空間を求めて 「専修大学校歌」のチャイム制作 近藤裕子

クローズアップ・インタビュー

株式会社陣屋 代表取締役 女将、株式会社陣屋コネクト 代表取締役 CEO

宮崎知子さんに聞く (聞き手) 川島葵

新会員代表者紹介

大東文化大学／関西学院大学／敬和学園大学／武蔵野美術大学／

聖カタリナ大学／聖心女子大学／昭和女子大学／東邦大学

執筆者・出席者のご紹介(掲載順)

私大連ニュース

編集後記

138 136 134

130

122 | 120 118 116

110

106

水、ミラノ。



想像を超える出来事が起こり続けている時代。

地方大学には、いま、何ができるのか。

1923年、日本で三番目の私立高等商業学校として誕生し
時代が必要とする学びとともに成長し続けてきた
わたしたち松山大学ができること。

新たな可能性という輝きは、学生たちの中に、地域の中に、
課題の中にこそある。そう思うのです。

四国・松山の地で、よりよい地域づくりを考え、
人と関わり、新たなつながりを探すこと。

時代ごとに現れる多様な課題を解決するため
専門教育で培った学びを、社会に還元すること。

学生が、地域が、学びの楽しさや大切さに気づき
成長という実りへの一步を踏み出す、その背中を押すこと。

地域を学び、地域を担う若者を育て

巣立ったあとも地域に根を張り、

つながることのできる関係性をつくること。

100年という年月を経てもなお、

わたしたちの成長は、まだまだ続いています。

人と地域を見つめることは、まだ見ぬ希望をつくること。

これからを生きる人を育て、

これからも地域とともに、成長する存在でありたい。

未来に、確かな実りをもたらす大学へ。



2023年、松山大学は創立100周年を迎えました。

学生生活の充実

多様性を尊重し、 充実した学生生活の場を提供。

キャンパスのある愛媛県松山市は多くの学生で賑わう、生活の利便性や経済性すべてがバランスよく整った文化の街。多様な価値観や関心を持った学生一人ひとりの立場を理解し、誰もが充実した学生生活を過ごせるよう、必要な支援体勢を整えています。



学びの可能性を 地域の発展と 貢献につなげる。

松山大学では、学生・教員が自治体、産業界、教育機関などとの連携を強化し、産業の活性化を目的とした社会連携事業を実践中。eスポーツ事業や商品開発など、多彩なジャンルのプロジェクトを通し、学生の主体的な活動と地域の発展と貢献を目指しています。



愛媛県立とべ動物園の魅力を発信 **Zoo Project**



愛媛の魅力を映像で発信 **「撮り旅」プロジェクト**



愛南町の真鯛を世界に知ってもらう **愛南マダイ応援隊**
— 第3回学生地域づくり・交流大賞 **優秀賞受賞**

学内から地域へ



知の拠点の学舎



樋又キャンパス



地域の知の拠点として、キャンパス環境を整備。

アカデミック・ソーシャル・commonsをはじめとして、学内には学生の学習と成長を促す空間を多数設けています。さらには地域の知と交流の拠点として、地域とのつながりを大切にした、魅力あるキャンパス環境の整備を行っています。



クラブ アクティビティ エリア

新設アリーナ、中庭を囲む部室のある
サークル活動の新たな拠点

— 2020年 創立100周年記念事業の一環として完成



myu terrace(ミューテラス)

快適なWi-Fi環境とパウダールームを
備えた学生の交流拠点

— 2020年度(公社)日本建築家協会 優秀建築賞受賞

University Current Review

大学時報

2023.07 / NO.411



「未来に、確かな実りを
もたらす大学へ」

新井 英夫

学校法人松山大学理事長
松山大学学長

予測困難で不安定な時代。地方大学には、いま、何ができるのか。

1923年、日本で3番目の私立高等商業学校として誕生した松山高等商業学校は、「真実」「実用」「忠実」という3つの「実」からなる校訓「三実」を掲げ、松山経済専門学校、松山商科大学、松山大学と名称を変えながら発展し、本年創立100周年を迎えた。

時代が必要とする学びとともに成長し続けてきた松山大学ができること。それは人と地域を見つめ、まだ見ぬ希望をつくること。これから生きる人を育て、これからも地域とともに、成長する存在でありたい。

コモンズとしての大学を目指して

上野 裕一 流通経済大学学長

はじめに

いったい何を言おうとしているのか、突拍子もないタイトルと思われるかもしれない。しかし、流通経済大学では真剣に大学Ⅱコモンズ(新しい社会システムを実現する共有かつ共創の空間)となることを目指している。

少子化が進む中で、すべての学生が、ストレスを感じることなく、自ら主体的に「学び」に取り組むことのできる環境を設ける。そして「共生社会」の実現に向け、地域社会において大学にしかできない役割を果たし、地域の人々に開かれ、共に歩む存在にしていくなことが、我々に与えられた社会的使命であると同時に社会的責任であると考えているからである。

私が学長に就任したのは、2021年4月1日である

が、就任と同時にReborn RKU Vision(RRV)を掲げ、この2年間どのようにすれば大学をコモンズ化できるのか考え、一歩ずつ進めてきた。障がい者の方々の創作したアートの展示会の開催や障がい者チャリーディングのサポート、ダイバーシティ共創センターの設置、LGBTQの理解促進、サードプレイスの設置準備等、具体的な形で取り組んできた。

これまでも本学は地域との連携に取り組み、部分的には教職員、学生を派遣し、街づくりの一端を担ってきたという自負はある。しかし、それだけでは何ともすっきりしない。

なぜか。これまでも産官学連携など大学が社会に貢献するということは、本学だけでなく、多くの大学が取り

組んできたことである。それにもかかわらず、すっきりしないのは、本学が本来持つ資源が十分に活かされていないことに加え、本学の将来像がなかなか見えにくかったと感じたからである。何より地域「貢献」という言葉が示すように、いわばお手伝いのものであり、地域とともに歩もうとする大学の強い意志が感じられなかったからである。

地域に愛される大学とは何か。地域の人々と一体となって大学をつくるということはどのようなことか。その先にある大学教育とは何か。

答えは歩きながら出すことが最も早いだろうと思う。

なぜなら、PDCAサイクルが重要なことは言うまでもないが、時と場合によっては、P(Plan、計画)を立てるのに時間ばかりが過ぎてしまい、結局、D(Do、行動)に移せないまま終わってしまうことがあるからである。

ともあれ、本学ではRKUCOMONSセンターを立ち上げ、大学が「人と人がつながることのできる場所」として自治体や民間団体と一層の連携を図り、学生、地域が一体となってCOMONSを創造、推進することによって、地域に愛され、必要とされる大学を目指している。

このことが達成(COMONSにゴールとしての達成はない

が、地域の方々から愛されていることがわかったと仮定して)できれば、大学冬の時代が叫ばれて久しい中、ますます少子化が進んでも本学は地域にとって必要な存在として生き残っていくことができるかと確信している。それは、いわば地域にとって必要不可欠な「景観」として生き続けることである。

1. 本学の歴史

本学は1965(昭和40)年に経済学部経済学科の単科大学として発足した。設置者は学校法人日通学園である。本法人に大学設立のための資金を寄附したのは財団法人小運送協会であり、この協会は小運送及びこれに関連する業務に従事する者の知的技能の向上と福祉の増進を目的につくられたものであった。そして、日本通運株式会社がこの小運送協会に寄附をし、同協会がその資金をそのまま大学設立のために出捐^{しゅけん}して、本学を設立したのである。

その後、産業界や地元自治体の支援もあって規模の拡大を図り、現在では5学部9学科、大学院5研究科を擁する社会科学系の大学にまで発展してきた。



2004年に竣工された新松戸キャンパス

その間、大学創立20周年の記念事業として1985(昭和60)年に千葉県柏市に全日制普通科の流通経済大学付属柏高等学校を設立し、2023(令和5)年には、流通経済大学付属中学校を設立し、今日に至っている。

なぜ、財団法人小運送協会が本法人に寄附をしたのかという点の通りである(本学ホームページより抜粋。
<https://www.rku.ac.jp/about/data/>)。

わが国の学校教育法は、その第2条第1項において、学校を設置することができるのは、国と地方公共団体及び私立学校法第3条に規定する学校法人のみ、と定めているが、日通学園はこの法律にいう私立学校の設置を目的として設立された法人である。即ち学校法人日通学園は流通経済大学を創設するために昭和40年2月4日に設立された。ただし、この法人に大学設立のための資金を寄附したのは財団法人小運送協会(平成6年「財団法人利用運送振興会」と改称)である。

小運送協会とは、小運送及びこれに関連する業務に従事する者の知識技能の向上や福祉の増進を図ることを目的につくられた文字通り小運送業界の財団で、昭和13年、日本通運株式会社を中心になってつくったも

のである。同協会は昭和15年4月から、23年までの間、業界の幹部養成のために運送業務の実務教習を行う修業年限1年の教育機関、小運送教習所を経営してきたが、戦後は、業界の従業員の子弟のために学生寮を経営するなど事業を縮小し、実態は日本通運の内部組織に近かった。

その小運送協会が大学設立の出捐者になったのは、日本通運が営利企業であったが故である。

つまり、財団法人小運送協会が担ってきた事業を本学が継承することを基盤とした上で、「流通経済一般に関する研究と教育を振興して、わが国経済の飛躍的發展を図るとともに、深く人文科学を攻究し、教養ゆたかな、視野の広い指導的人材を育成して、国民経済の健全化と福祉の増進を図る」(本学設立趣意書、本学ホームページ・
<https://www.rku.ac.jp/about/philosophy/>)ことを目的として本学は設置されたのである。

2. 本学の社会的責任とは何か

どの大学も社会的責任があることは言うまでもないが、本学の場合、前述のような目的の下、社会に有為な人材を

輩出してきた。

しかし一方で、「流通」を大学名に掲げている希少な大学であるということは裏腹に、本学学生の「流通」に対するイメージは「トラックの運転手」が大部分であった。

今日、世界的な物流関係企業が、流通網の整備や、より効率的な物流ルートの構築に向けた不断の努力をして大企業へ成長したにもかかわらずである。さらには、財団法人小運送協会に大学設立のための資金を寄附した日本通運株式会社が、日本だけでなく世界中の人々の生活を支えている現状であつてもである。

この現象の分析は慎重にやらなければいけないが、自身の長い教員生活の実体験から言えることは、高校を卒業するまでに「流通」に関する情報が少なすぎることに加え、今の若者は「将来的なビジョンよりも近未来」、「仕事内容よりも賃金」、「つらい仕事よりも楽な仕事」に流れていることが原因であると思われる。

つまり、「社会のために私に何ができるか」というよりも、「自分自身のために何が役立つか」の方に重きを置いている学生が多いのではないかと思われるのである。

このことが良い悪いというのではなく、そういう状況に

ある学生が将来のわが国を支える存在になっていくことは間違いなことであり、それはそんなに遠い将来のことではない。その事実を我々大学教育に携わる立場の人間が理解し、現在の教育をどのように変えていくことができ

るかが肝要である。言いかえれば、本学はここで学ぶ学生一人一人の中に、社会の中でこそ生きていける自分を自覚させ、社会のためにどう行動するかが、「自分自身のための何かとなる」ことを体感させるような学びの場を、地域社会の力を借りながらつくり上げていく必要がある。

価値観の多様化とグローバル化は否応なく世界を飲み込み、新しい教育が今日ほど求められている時代は他にないと言えよう。

そうした流れの中で、本学は大学としての社会的責任を果たすことを目的に、先述したように手探りしつつ、大学のコモンス化を着々と進めているのである。

3. コモンスとは何か

ここで改めてコモンスとは何かについて考えてみたいと思う。現状ではまだ明確に定義されていないようであるが、いくつかある中で小野英一氏による定義が分かり易い

ので、以下に引用しておく(非営用語辞典／小野英一
https://www.koueki.jp/dic/hieiri_323/)。

コモンズの概念については論者によりさまざまであるが、一般的なものとして、共有資源を共同管理する仕組みがあげられる。あるいは、コモンズは「共有地」と訳されることもあるとおり、共有資源そのものを示す場合もある。(中略)日本では入会地が代表的なコモンズといえる。伝統的なコモンズは森林、牧草地などであるが、科学技術が発達した現代では、サイバー空間などの新しいコモンズもあらわれている。

これに従えば、日本の場合、入会地のことを指すものの、現代社会においてはインターネット空間も含む多様な空間と言えよう。

そして、このことを大学に当てはめて考えると、「人と人がつながることのできる場所」として自治体や民間団体と一層の連携を図り、学生、教職員、地域が一体となって新しい社会システムを実現する共有空間を目指すことが大学のコモンス化ということになるであろう。

ここでのポイントは、これまで自治体や民間団体だけではできなかったことが大学と一体となることで実現可能

になり、現代に最適な社会システムを形作れるようになることにある。

つまり、大学も旧態依然としたやり方だけでは対応できないと言える。

4. 本学の取り組み

新しい社会システムを実現すると言っても答えがあるわけではなく、冒頭に述べたように歩きながら考えている状態であるが、これまでに本学が取り組んできたことをいくつか紹介したい。

2021年から今に至るまで、本学では「であうアート展」と称して障がい者の方々がつくるアート作品を展示してきた。

これまでに本学の2つのキャンパス(千葉県松戸市の新松戸キャンパスと茨城県龍ヶ崎市の龍ヶ崎キャンパス)に加えて、茨城県龍ヶ崎市、水戸市、東京都中央区銀座、宮城県大和町で「であうアート展」を開催してきた。今年度はさらに、岩手県釜石市、福島県いわき市、青森県八戸市へとさらに出会いの空間が広がる予定である。

なぜ、「であうアート」なのかと言うと、アートを通して

いろいろな人があうことができるようにということに加え、障がい者を支える社会システムに新たな選択肢を加えることができるのではないかと考えたからである。つまりこの試みは、単にボランティアとして展覧会の場を提供するのではなく、コーディネーターを介し、開催にかかる費用の一部が、障がい者アーティストの皆さんの制作費の一部に充てられる仕組みを採用していることが重要である。私たちとアーティストの皆さんがともに、社会に有益なアート空間を創る作業を「共創」しているのである。

当然、そこには学生や教職員、民間団体も一緒に関わり、障がい者アートを通じての「学び」も存在する。

さらに、障がい者チアリーディングの支援も行ってきた。これまでも障がい者チアリーディングの活動は行われてきたが、大学として支援するのは初めてである。

障がい者チアリーディングを支援する根本的な理由は、本学が掲げている「誰一人取り残さない」思想を体現しているからである。

現在、大学にはチアリーディング部があるが、大学生が障がい者の子どもたちと一緒に演技し、時には練習も共にしている。

障がいの有無にかかわらず、我々は同じ時間と場所を共有することができるのであり、新しい社会システムを実現する共有空間の具現化と言えよう。

最後に、本学はダイバーシティ共創センターを、半年間の準備期間を設けた後の2022年度に開設した。これは言うまでもなく、障がいの有無、病歴、家庭環境、経済状況、国籍、言語、民族(民俗)、文化、宗教、信条等の多様性を尊重し合い、異なる背景を持った一人一人が、伸び伸びとその個性と能力を発揮できるキャンパスづくりを目指すためのものである。

遅ればせながらの感は否めないが、それでも「誰一人取り残さない」ためには必要不可欠であり、繰り返しになるが、新しい社会システムを実現する共有の空間づくりのためにも重要な取り組みである。

これらを有機的に動かしながら、学生、教職員と地域の方々や自治体、民間団体が一緒になって取り組むことで必ず良い社会が創造されよう。

その中心的役割を本学が今後も果たしていくことが、社会に有為な人材を輩出する社会的責任を担う大学としての使命であると、信じて疑わないのである。

おわりに

本学の教育活動の柱にあるのは「実学主義」である。実学とはいったい何か。それは「理念を実際の行動で示す」ことに他ならない。これは理念の具現化である。地域社会のコモンズとなる、という目標をより明確にするため、本学はこの4月から学内に「RKUコモンズセンター」を設立した。それは単なる「地域連携」を進めるセクションであつてはならない。共生社会の実現のために、斬新な発想と取り組みで新しい地域との連携を創造し、具体化し、実行する。そしてそれは大学教職員と学生、そして地域の一人一人とともにつくり上げていく空間でなければならぬ。

学校法人日通学園と本学は、2025年に創立60周年を迎える。人の一生で言えば、「還暦」であり、人生を一回りしたことになる。つまり、新たに生まれ変わる節目が2年後にやってくる。その機会を活用し、私たちは大学が核となつて創造するコモンズ、地域共生社会の姿を現実の行動をもって示したいと思う。理想論のみを言わないことが「実学」を旨とする本学の生き方であるから、当然の使命と言えよう。それは、流通経済大学が共生社会を具現

化した、日本でたった一つの大学であり、唯一の存在となることへの挑戦でもある。



ダイバーシティ共創センターの活動の様子